

No      KaTa      Ku      Bo

# 野方久保遺跡 3

—第4次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第438集

1995

福岡市教育委員会

# 序

福岡市の西部に広がる早良平野は、かつては稻穂がたわわに実るのどかな田園地帯でした。しかし、近年は都市の膨張による宅地化が著しく、その姿を一変させています。

この早良平野の西縁麓には、弥生時代後期の環濠集落として著名な国史跡の野方遺跡を始めとする多くの遺跡が広がっています。

野方久保遺跡は、この町話を望む低位段丘上にあり、その北端に営まれた弥生時代中期の豪墳墓地からは細形銅劍や玉類を副葬した豪墳墓が発見されています。

今回の第4次調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡群が検出され、段丘上に営まれた弥生時代の集落の姿が次第に明らかになってきました。

本書の資料が、広く市民の皆さんに活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になることを願うものであります。

また、発掘調査から整理報告までの間には多くの方々のご指導とご助言をいただきました。特に西鉄不動産株式会社の諸氏には格別のご理解とご協力をいただきました。記して心から謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

## れいげん

- 本書は、福岡市教育委員会が1992年9月7日から10月23日に、西鉄不動産株式会社の分譲住宅造成に先立つ緊急に発掘調査した野方久保遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
- 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
- 遺構は、竪穴住居跡をSC、土壇をSK、溝をSD、ピットをSPと呼称を記号化し、遺構番号は記号のあとにすべての遺構を通してナンバーを付した。
- 本書に掲載した遺構実測図は小林義彦が、遺物の実測図は小林・大塚紀宣・尾花 見が作成し、打製石器は杉山富雄氏にお願いした。また、製作は小林と八丁由香、藤村住公恵が行なった。
- 本書に掲載した写真は遺構・遺物とともに小林が撮影した。
- 野方久保遺跡第4次調査にかかる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管する予定である。
- 本書の執筆・編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：92232	遺跡略号：NKU-4	分布地図番号：91-A-7
調査地地積：福岡市西区野方・丁目517 3外		
開発面積：3,127m <sup>2</sup>	調査対象面積 270m <sup>2</sup>	調査実施面積 450m <sup>2</sup>
調査期間：1992年9月7日～10月23日		

## 本文目次

序	
I. はじめに	3
1. 発掘調査にいたるまで	3
2. 発掘調査の組織	3
II. 立地と歴史的環境	4
1. 立地と歴史的環境	4
2. これまでの調査	5
III. 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 調査の記録	7
1). 壺穴住居跡	8
2). 土 壤	14
3). 溝	23
4). ピットと包含層の遺物	23
IV. おわりに	29

## 挿図目次

1. 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	2
2. 野方久保遺跡位図 (1/6,000)	4
3. 第4次調査区周辺現況図 (1/1,000)	5
4. 調査区全景 (西より)	6
5. 第4次調査区遺構配置図 (1/200)	7
6. 63・80・81号住居跡実測図 (1/80)	8
7. 63・80号住居跡 (西より)	9
8. 81号住居跡 (南より)	9
9. 64・65・68・69・90号住居跡実測図 (1/80)	10
10. 63～65号住居跡出土土器実測図 (1/4)	11
11. 68・80・81・90号住居跡出土 土器実測図 (1/4)	12
12. 壺穴住居跡群 (北より)	13
13. 65号住居跡 (南より)	13
14. 64・68・69・90号住居跡 (北より)	13
15. 3・4・12・22・26・27・48・50・72号土壤 実測図 (1/30)	15
16. 14・28・29・66号土壤実測図 (1/40)	16
17. 3号土壤 (西より)	17
18. 12・14・22・26～29号土壤 (北より)	17
19. 50号土壤 (東より)	17
20. 66号土壤 (西より)	17
21. 82・83・86～88・91・92・112号土壤 実測図 (1/30)	18
22. 土壤出土土器実測図 1 (1/4)	20
23. 上土壤出土土器実測図 2 (1/4)	21
24. 土壤出土土器実測図 3 (1/10)	21
25. 11号溝 (北より)	22
26. 11・67・77号溝出土土器実測図 (1/4)	22
27. ピット出土土器実測図 (1/4)	23
28. 包含層出土土器実測図 1 (1/4)	24
29. 包含層出土土器実測図 2 (1/4)	25
30. 石器実測図 1 (1/1)	26
31. 石器実測図 2 (1/1・1/4)	26
32. 石器実測図 3 (1/4・1/6)	27
33. 銅鐵実測図 (1/2)	28
34. 鉄器実測図 (1/3)	28
35. 土製品実測図 (1/3)	28
36. 銅鐵出土土地名表 (福岡市)	29



# I. はじめに

## 1. 発掘調査にいたるまで

福岡市の西部に抜がる早良平野は、近年までは一面に水田がつづくのどかな都市近郊の田園地帯であった。しかし、福岡市の都市機能の拡充による急速な人口増加は郊外の市街化を押し進め、宅地の開発は平野一円に及んでいる。殊に国道202号バイパスの開通を機にしてその傾向が顕著にみられ、昔日の面影は次第に失われつつある。

平野の西縁に連なる飯盛山から叶岳、長垂山にかけての山麓一帯も1970(昭和45)年頃より大小の住宅団地が造成され、山裾は次第に宅地化しつつある。1990(平成2)年、十郎川上流の西区野方一丁目に所在する2,550m<sup>2</sup>の畠地に分譲住宅を造成することが美和住宅産業㈱によって計画され、埋蔵文化財の有無照会が埋蔵文化財課に提出された。申請地は「野方久保遺跡」内にあり、周辺では細形銅劍や勾玉等を副葬した喪棺墓群が調査されていることから2度に亘って試掘調査を実施した。その結果、申請地からは弥生時代後期～古墳時代初めの竪穴住居跡や土壙が検出され、発掘調査が必要と判断されたが、景気の後退によって開発計画は一時中断された。

その後の1992(平成4)年4月、周辺域の畠地を加えた3,127m<sup>2</sup>に新たな分譲住宅の開発が西鉄不動産㈱によって計画され、その旨の申請がなされた。これを受けた埋蔵文化財課は、試掘調査のデータとともに西鉄不動産㈱との間に数度の協議を重ねた。その結果、住宅用地は盛土によって現状保存を図り、市道に移管される道路用地部分についてのみ発掘調査を実施することとなった。

1992(平成4)年9月7日に開始した発掘調査は、秋風の立つ10月23日に終了し、31日すべてを撤収した。発掘調査では、十郎川に面した河岸段丘上で重視した弥生時代後期の竪穴住居跡群と溝を検出し、十郎川を挟んで対峙する野方中原遺跡の環濠集落跡と相似た在り様を示し、早良平野における弥生時代史研究の貴重な資料を与えるものとなった。これも西鉄不動産㈱の担当者各位のご理解と暑中での発掘調査や資料整理に従事された方々のご協力に負うところが大きく、ここに記して感謝の意を表します。

## 2. 発掘調査の組織

調査委託	西鉄不動産株式会社	代表取締役	笛島勘輔
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	井口 雄哉(前任)
			尾花 剛(現任)
調査担当	福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課	第1係	
庶務担当	第1係長	飛高憲雄(前任)	横山邦雄(現任)
		吉田麻由美(前任)	西山結香(現任)
調査担当	小林義彦		
調査員	大塚紀宣(九州大学大学院)	尾園 晃(現桂川町教育委員会)	八丁由香
	藤村佳公恵		
調査・整理作業	大瀬良清子	小川仁史	坂田美佐子
	柴田タツ子	柴田常人	上妻崎孝子
	馬場イツ子	脇ウメコ	松本藤子
		村鳴里子	百武義隆
			門司弘子

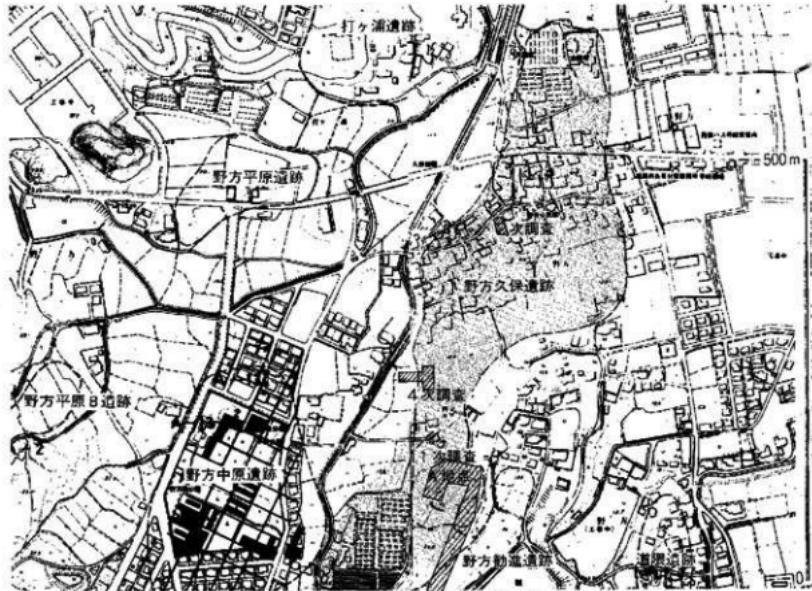
## II. 立地と歴史的環境

### 1. 立地と歴史的環境

福岡市の西部に拡がる早良平野は、三方を背振山地のその支脈によって囲まれ、北の博多湾にむかって開口する狭小な平野である。この早良平野の西縁には西山・飯盛山、叶岳、長垂山の小山塊が連なり、糸島平野との境を画している。これら山塊の麓には、小河川の開析によって形成された段丘と山塊から派生する舌状丘陵が幾筋も連なっている。

野方久保遺跡は、西区野方の飯盛山北麓に源を発して今津湾に注ぐ十郎川の上流域右岸にあり、福岡市文化財分布地図「西部 I - 91. 92」で周知化されている。野方久保遺跡は、この十郎川の開析によって形成された細長い低位段丘上に立地し、その段丘上には弥生時代から古墳時代の集落跡や墳墓域が拡がっている。また、その上流域につづく丘陵上には野方塚原遺跡、野方勘進原遺跡、羽根戸原遺跡等があり、十郎川を挟んだ左岸には弥生時代後期の環濠集落跡として著名な国史跡の野方中原遺跡が対峙している。

野方久保遺跡のある室見川の左岸域は、この丘陵部や段丘上を中心に遺跡が展開し、漸次沖積地へと拡大する。旧石器時代～绳文時代の遺跡は散漫で、羽根戸遺跡や吉武遺跡等があるに過ぎない。しかし、弥生時代になると豊富な青銅利器や玉類を副葬する吉武遺跡を中心核として遺跡数は急増し、平野一円に広く展開する。野方久保遺跡にも青銅利器を副葬する豪墳墓があり、室見川右岸には有田遺跡、飯倉唐木遺跡、東入部遺跡がある。また、十郎川の対岸には野方中原遺跡、湯納遺跡や終末期の墳墓として著名な宮の前遺跡がある。古墳時代には沖積地に水田が営まれ、その生産力を背景とし



2. 野方久保遺跡位置図(1/6,000)

て平野の西縁に連なる山麓地帯には広石古墳群や羽根戸古墳群、金武古墳群等をはじめとする大小の群集墳が造営される。奈良時代以降は城ノ原廃寺があり、下山門遺跡や野方塚原遺跡等では製鉄跡が確認されている。また、野方周辺は「和名抄」に記載されている「頬田郷」に比定されている地域であり、福岡平野から糸島平野を結ぶ古代官道の駅家として要衝の地である。

## 2. これまでの調査

十郎川の上流域には野方久保遺跡をはじめ野方中原、野方塚原、宮の前、湯納、拾六町ツイジ遺跡等がある。殊に弥生時代～古墳時代には最も濃密に拡がり、平野における有力な拠点的集落域(集団)としての性格やその様相は次第に明らかになりつつある。

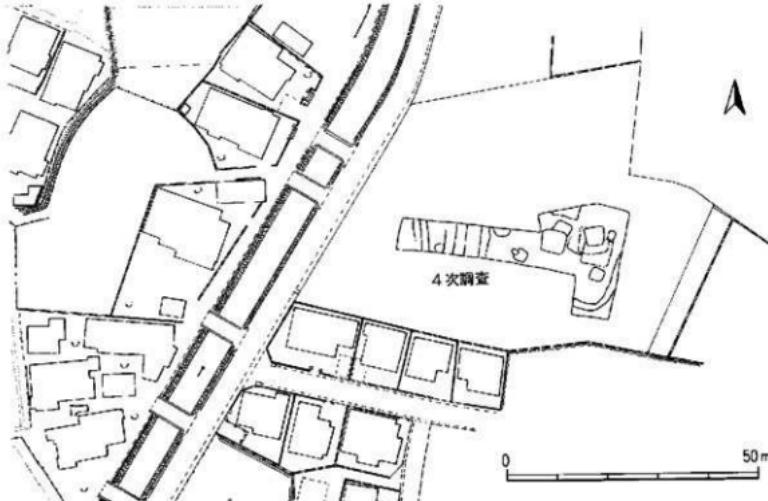
**第1次調査**：1983(昭和58)年調査。弥生時代後期～古墳時代初めの堅穴住居跡(70棟)や掘立柱建物跡(34棟)が確認され、銅鑓、青銅鋤先、鉄斧や朱の付着した注口鉢が出土している。また、後期の方墳と奈良～平安時代の水出跡も確認されている。

**第2次調査**：1986(昭和61)年調査。弥生時代前期～中期の甕棺墓と古墳時代の柱穴等が確認された。このうち中期前半の汲田式の甕棺墓には、細形鋼劍(2)と把頭鎌(1)、碧玉製管玉が、また、中頃の須次式の甕棺墓には翡翠製勾玉や鐵鑓が副葬されていた。

**第3次調査**：1991(平成3)年調査。古墳時代後期～中世の土壙、溝、ピットを検出した。

**野方中原遺跡**：1973(昭和48)年に調査され、1976(昭和51)年に国史跡に指定。弥生時代後期～古墳時代の堅穴住居跡群と墓地が確認された。このうち弥生時代後期の堅穴住居跡は溝に囲まれた環濠集落跡である。また、石棺墓には内行花文鏡、獸帶鏡、勾玉、管玉等が副葬されており、中期以来の有力な拠点的集落であったことが窺われる。

**宮の前遺跡**：1969(昭和44)年調査。弥生時代終末～古墳時代初めの堅穴住居跡群と複数の箱式石棺墓を埋葬主体とする墳丘墓が確認されている。石棺墓にはガラス製小玉や碧玉製管玉等が副葬されていた。



3. 第4次調査区周辺現状図(1/1,000)

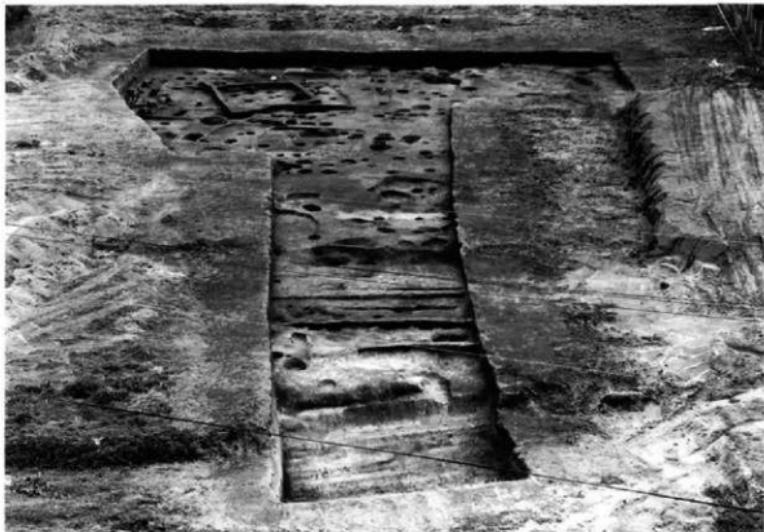
## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

福岡市の西部に抜がる早良平野の西縁には飯盛山から叶岳、長垂山と続く小山塊が連なって糸島平野との境を画し、飯盛山の北麓に源を発する十郎川がその山裾を縫うよう蛇行しながら今津瀬に注いでいる。この十郎川の流域には、河川の開析によって形成された低～中位段丘が流れに沿って点在している。野方久保遺跡は、十郎川上流の右岸に形成された細長い段丘上に立地している。

第4次調査区は、長さ1,000m、幅100～250mの細長い段丘上に抜がる野方久保遺跡の中央部西側の十郎川に面した緩斜面上に占地する。その北方200mの距離には弥生時代前期末～中期末の墳墓墓地である第2次調査区がある。この中の中期初めの墳墓には細形銅劍や把頭飾のほかに碧玉製管玉、翡翠製勾玉等が副葬されおり、地域的な優位性をもった集落の墓地であったことが偲ばれる。また、南方200mには第1次調査区があり、弥生時代後期～古墳時代初めの竪穴住居跡や掘立柱建物跡群からなる大集落跡が調査されている。

第4次調査区は、十郎川に面した低位段丘の緩斜面にあたり、現況は4～6段に開削された農地で、東の段丘頂側と西の河床側とでは1.5～2mの比高差がある。発掘調査は、側溝や埋設管の付設によって破壊される道路用地についてのみ実施し、住宅用地は盛土による現状保存を図った。そのため調査区は、申請地の中央を幅6m、長さ35mを東西に長くトレンチ状にのばし、更にその東端に幅7m、長さ22mの調査区を南北方向に付設したT字形の調査区設定になった。このように調査区が変則的で狭長なため全城における遺構の拡がりは明らかでないがその一端は窺え、段丘上に立地する野方久保遺跡の様相は周辺の調査(1～3次)成果と併せてその消長と展開は想起することができよう。

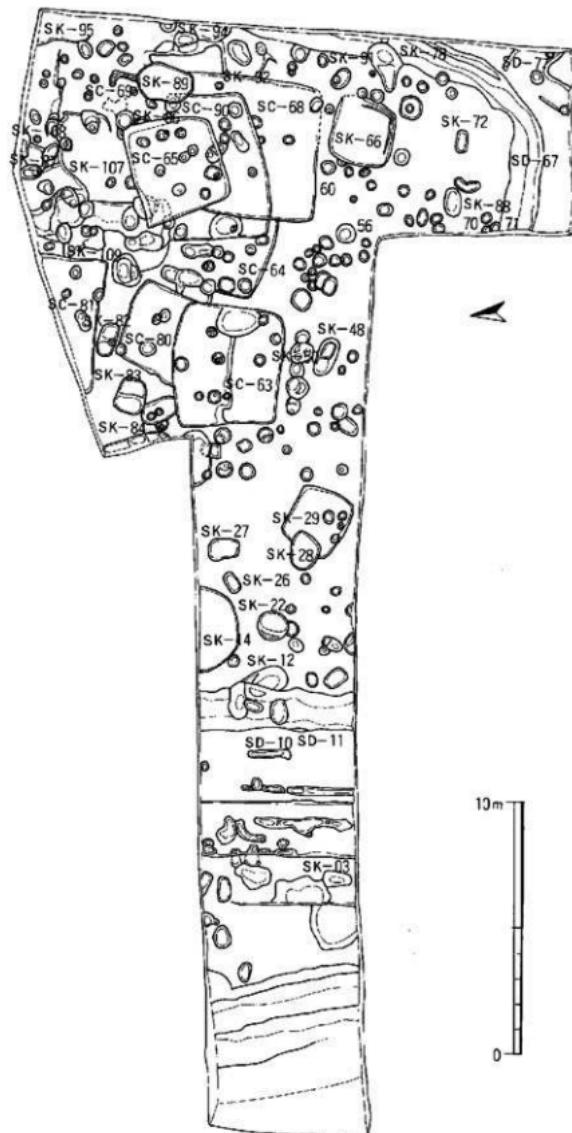


4. 調査区全景（西より）

## 2. 調査の記録

第4次調査では、豊穴住居跡8棟、土壙29基、溝8条と多数のピットを検出した。これらの遺構は低段丘の緩斜面に立地する占地的な規制からか中央部の南北溝(SD-11)を境として、段丘頂の東側では濃密に拡がるが十郎川に面した西側ではきわめて希薄な分布を示す。時期的には、近世の溝5条を除いてはいずれも弥生時代後期～古墳時代初めに比定される。

層序的には、20～30cmの耕作土下に弥生時代後期～古墳時代の遺物を含んだ暗黄灰色土(層厚20cm)と暗灰褐色土(層厚10cm)が順次堆積し、55～70cmの深さで黄灰色シルト質土～灰褐色砂質土の基盤層に達する。豊穴住居跡等の遺構はこの遺物包含層の下位から掘り込まれている。基盤層は、十郎川に面した西にむかって緩やかに傾斜し、標高は東の段丘頂側が17.2m、西側の旧河川上端が16.5m、旧河床で14.8mを測る。また、調査区の西部には十郎川の旧河床があり、遺物包含層下には赤褐色粘砂土、淡灰色細砂、暗灰色粘質土、暗灰色シルト質土が互層をして砂礫層の旧河床面に達する。



5. 第4次調査区遺構配図(1/200)

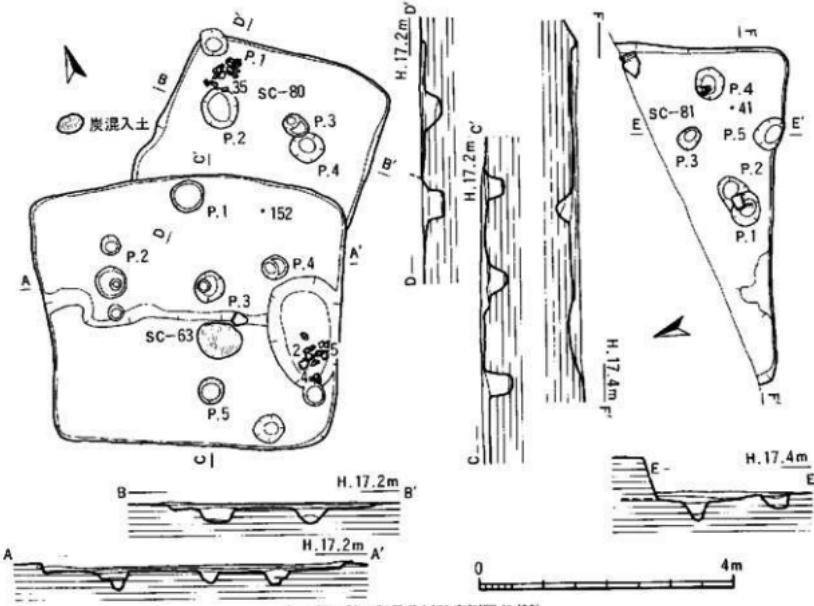
### 1). 竪穴住居跡

第4次調査では8棟の竪穴住居跡を検出した。これらの住居跡は調査区東側の段丘上に近接して分布し、その重複関係から4~5期に亘る変遷が窺える。しかし、調査域が狭長なためにその在り様は明らかでないが、東の段丘頂に集落の中心城が拡がっているものと想定される。全体に削平が著しいが、構造的には2本柱と4本柱を主柱穴とし、平面形はいずれも方形プランをなす。また、この住居跡群を囲むように2条の溝(SD-11、67)が矩形状にあって環濠状(?)をなしている。十郎川の左岸に対峙する野方中原遺跡と合わせて当該期の集落構成を考える一証左となろう。

#### 63号住居跡 SC-63 (6.7.10.31.36)

調査区東側の段丘上に位置する住居跡群中で最も南西端にあり、北壁は80号住居跡を切っている。平面形は東西4.3~4.9m、南北4.0mの方形プランを呈し、北壁がやや膨らむ。壁面は急峻で、壁高は7~15cm。床面は平坦で、南半には高さ5cmほどのベット状造構を造り出している。主柱穴は中央部にある南北軸の2本柱(P3、P5)で、柱間は1.7m。柱穴は径40~50cmの円形で、深さは35~40cm。この主柱穴の間には80×100cmの範囲に灰層が薄く堆積していた。また、東壁の中央部には壁面に沿って長軸175cm、短軸110cmの楕円形の土壙がある。深さは30cmで、舟底状の断面形をなす。遺物はこの土壙上から甕(2)、甕(4、5)が、また北壁際の床面上から石器(152)が出土した。

1は口径11.4cmの小型甕、口縁部は短く直口し、体部は扁球形をなす。外面はナデ、内面はヘラケズリ。2は底径6.8cmの甕で、胴部は球形をなす。外面は縦刷毛目、内面はナデ。3~5は甕。3は口径17.2cm。口縁部は短く「く」字状に外反し、胴部は球形をなす。外面はハケ目、内面はヘラケズリ。6、7はミニチュア土器。6は底径2cmで、体部は内湾気味に立ち上がる。7は底径3.8cm。肉厚の体部は



6. 63・80・81号住居跡実測図(1/80)

短く立ち上がる。8は口径13.9cmの須恵器壺蓋。口縁部は内湾気味に直口し、内唇に段を作る。9は口径11cmの須恵器壺身。口縁部はストレートに内傾し、端部は小さく肥厚する。外底面はヘラケズリ、内底面はタタキ後にナデ。152は安山岩質の四基式石塼。基部と先端部を欠き、現長2.7cm、身幅は1.8cm。183は幅4~12mm、厚さ1~1.5mmの先広になる板状の鉄器4枚が銹着している。鉄鎌の茎か。

#### 6 4号住居跡 SC-64 (9. 19. 12. 14)

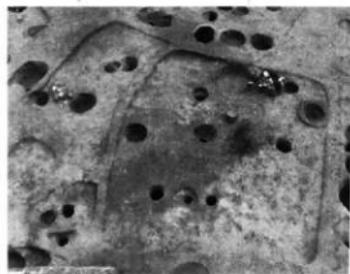
調査区東側の段丘上にある重複する住居跡群の最西端に位置し、65・68・90号住居跡よりも古い。前平が著しく南西隔壁を残すのみであるが、主柱穴から復原すると平面形は東西は5.7~6.1m、南北は5.6~6mの南壁がやや膨らんだ方形プランになろう。壁面は急峻で、壁高は10~15cm。床面は中央部が浅く凹レンズ状をなし、固く締まった暗茶褐色土が薄く堆積していた。主柱穴は4本柱(P1~P4)で、柱間は東西が3~3.5m、南北が2.2~2.8mで北西隅柱が不整合に内傾している。覆土中からは袋状口縁壺(10)や小型丸底壺(11)等が出土している。

10は口径10.8cmの袋状口縁壺。外面には丹塗り痕がある。11は口径11.8cmの小型丸底壺。口縁部は短くストレートに外反し、胴部は扁球形をなす。外面はナデ調整、内面はケズリ。12、13は甕の底部。底径は12が8.4cm、13は8.2cm。外面は粗いハケ目、内面はナデ。14は底径16.2cmの高環の脚部。

#### 6 5号住居跡 SC-65 (9. 10. 12. 13. 34)

調査区の東側に重複する住居跡群の中央にある小型の住居跡で、最も新しい。平面形は東西が3.3~4m、南北は3.5mの北壁がやや抜がる方形プランをなす。壁面は急峻で、壁高は35cm。床面は中央部が浅く凹むが、貼り床は確認できなかった。主柱穴は中央部にある東西軸の2本柱(P5、P6)で、柱間は2.3mである。柱穴は40~55cmの円形で、深さは40~45cm。遺物は壁際の床面上から小型丸底壺(17)、甕(19)、鉢(25)が、また、南西隔壁際(179)と覆土中(180)から2本の銅鎌が出土した。

15~18は小型丸底壺。15は口径8.8cm、口縁部はストレートに外反する。16は口径10.2cm。口縁部は短く直口し、胴部は球形をなす。17は口径6.8cm、器高10.3cm。直口する口縁部は僅かに外反し、厚い胴部は球形をなす。18は口径9.6cm、器高8.2cm。短く「く」字状の口縁部は短く外反し、胴部は扁球形をなす。19、20は甕。19は球形の胴部に尖り底の底部がつく。外面は継ハケ目、内面はヘラケズリ。20は口径15.8cm。口縁部はストレートに外反し、胴部は球形をなさう。外面はハケ目後にナデ、内面はヘラケズリ。22、23は高環。口径は22が23.6cm、23は16.8cm。环部は体部下半で弱い稜を作り、口縁部は大きく外反する。24~26はミニチュア土器。24は口径5cm、器高4.3cm。体部は内湾気味に直口し、口縁部は小さく外方に摘み出す。25は口径11.6cm、底径4.7cm、器高7.4cm。口縁部は体部からストレートに外反する。27は陣笠状をなす甕の蓋である。179、180は長茎脚付式の銅鎌。鎌がとおる茎身は菱形の断面形をなし、180は細身である。茎の断面は円形をなし、179はバリができる。



7. 63・80号住居跡（西より）

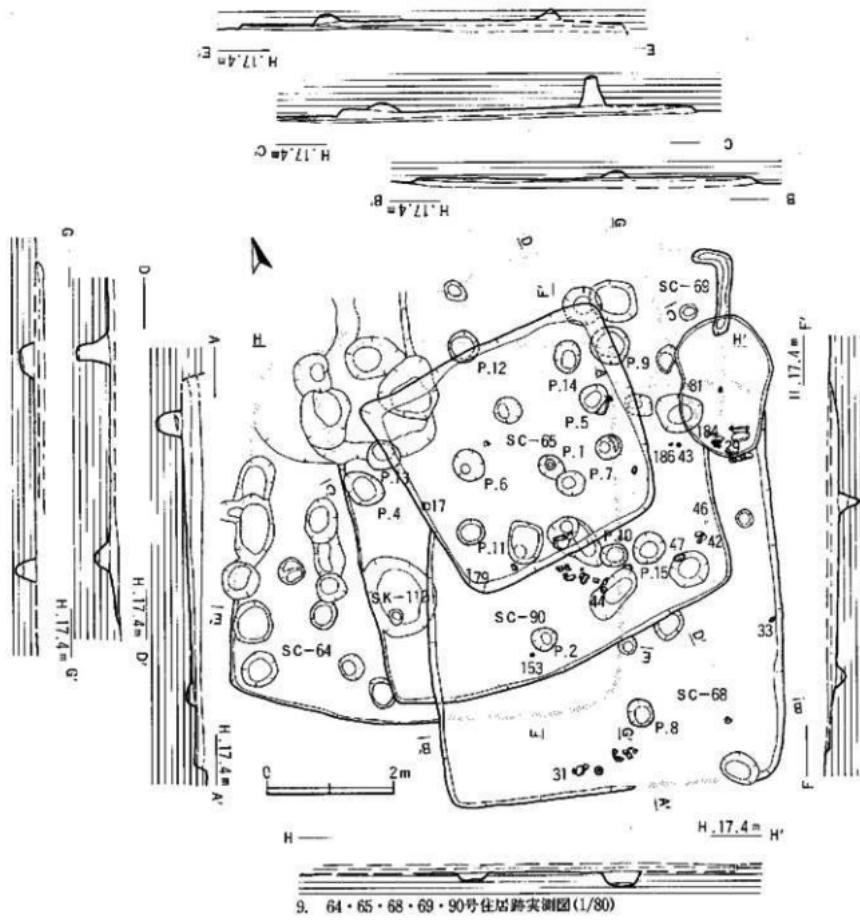


8. 81号住居跡（南より）

## 68号住居跡 SC-68 (9. 11. 12. 14. 31. 32. 33. 35. 36)

調査区の東側に重複してある住居跡群中の南東端に位置する住居跡で、90号住居跡よりも新しく、65号住居跡よりも古い。北壁が消失しているが、平面形は東西が5.4m、南北が6.3mの長方形プランになろう。壁面は急峻で、壁高は10~15cm。床面は平坦であるが、90号住居跡の覆土上には薄い黄茶褐色土層が固めに敷かれていた。主柱穴はやや東壁寄りに位置する南北軸の2本柱(P7、P8)で、柱間は4.3mである。柱穴は径40cmの円形をなし、深さは10~20cm。遺物は壁面に沿った床面上からは小型丸底壺(29.31)、甕(32)や鉄斧(184)が、また覆土中からは投弾(201)や小玉(157)が出土している。

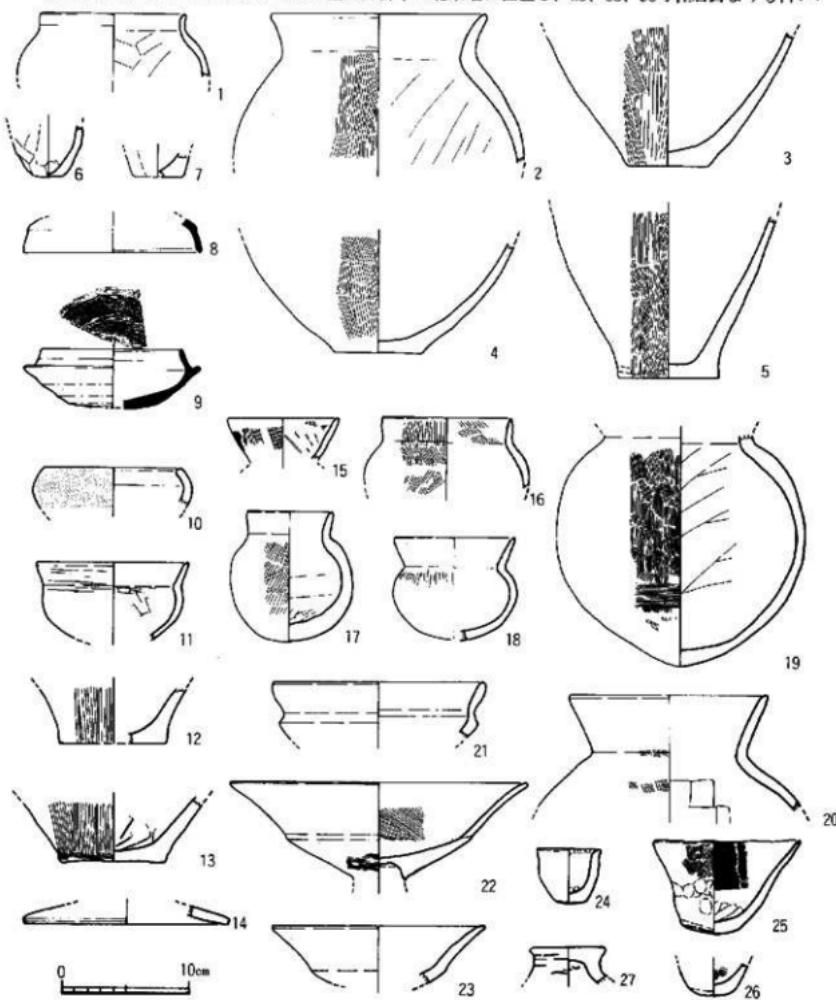
28~31は小型壺。28は口径7.8cm。口縁部は短く直口する。29は口径8.2cm。器高8cm。口縁部はストレートに外反し、胴部はやや肩の張った扁球形をなす。30は10.9cm。口縁部はストレートに外反し、胴部は肩の張った球形をなす。外面はハケ目、内面はヘラケズリ。31は口径10.6cm。口縁部は短く外



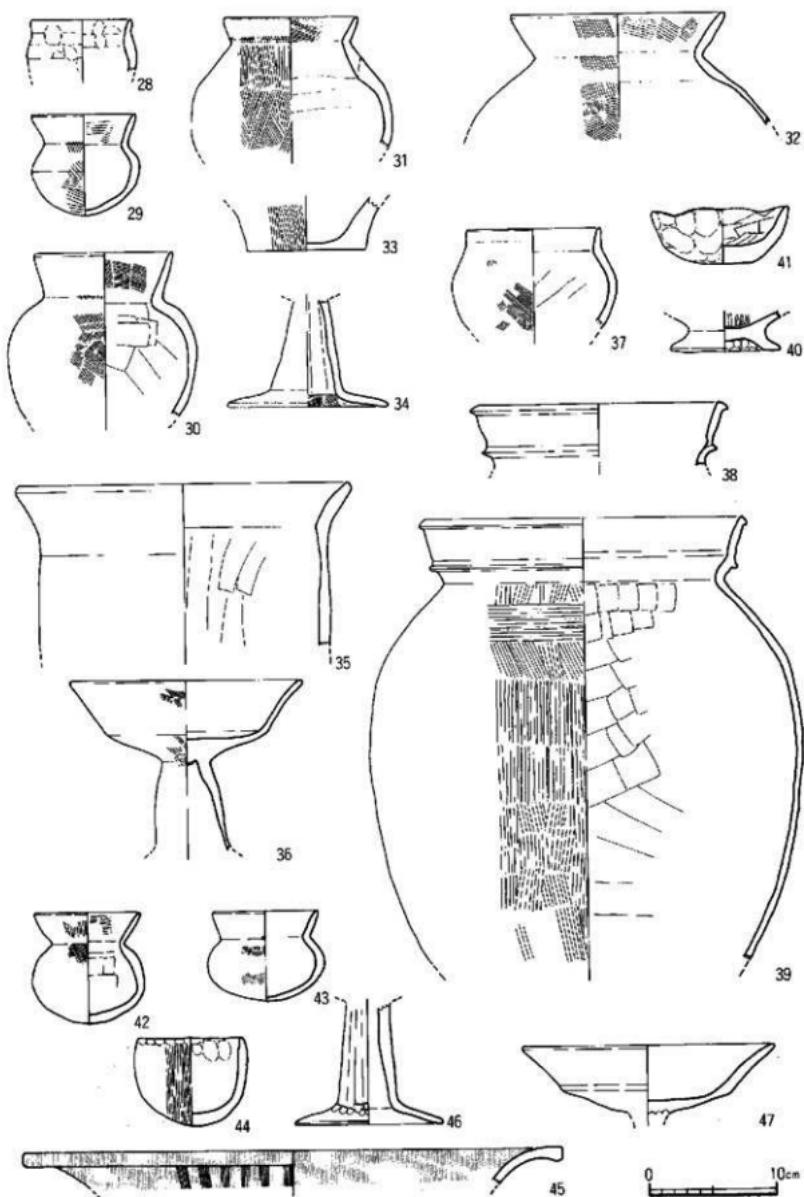
反し、頸部には凹線状の段がつく。32は口徑16.9cmの壺。口縁部は「く」字状に外反し、腹部は球形をなす。34は底径12.6cmの高壺。ストレートにのびた脚部は強く屈曲して外方に開く。153は無茎円基式の三角形鐵で、黒曜石製。長さは2cm、幅は1.8cm。167は砂岩質の砥石で、中央部が大きく凹む。幅は3.9cm、厚さは0.9~2cmで、延面は4面。157は径4mm、厚さ3mmの滑石製小玉。184は長さ8.4cm、刃部幅4.1cmの鉄斧で、刃部は短冊形をなす。鍛造品であろう。201はラグビーボール状の投弾。

#### 69号住居跡 SC-69 (9.14)

調査区東側の段丘上に重複してある住居跡群中の北東端に位置し、65、68、90号住居跡よりも古い。



10. 63-65号住居跡出土土器実測図(1/4)



11. 68·80·81·90号佳店出上上器実測図(1/4)

住居跡は北東隅壁を除いてそのほとんどが新出する住居跡に削平されている。そのため全容は判然としないが、遺存する主柱穴から平面形は東西6m、南北6.5mほどの方形プランに復原できようか。壁面は消失しているが、壁下には幅20~25cm、深さ10cmの周溝が巡っている。壁下に周溝の巡る住居跡は検出された住居跡中では本造構だけである。床面は平坦で、周溝に沿った一部に遺存していた。主柱穴は東西柱間が2.3m、南北が3~3.3mの4本柱(P9~P12)であろう。柱間削平による消失が著しく特定できる遺物は出土していない。

#### 80号住居跡 SC-80 (6.7.11)

調査区東側の段丘上にある小型の住居跡で、南壁は63号住居跡に切られている。平面形は南壁が消失しているが、一辺が3.2~3.5mほどの方形プランをなそう。壁面は急峻で、壁高は6~10cm。床面は平坦で、貼り床等は検出できなかった。主柱穴は北壁寄りにある東西軸の2本柱(P2、P4)で、柱間は1.5m。柱穴は径40~60cmの円~楕円形で、深さは23~28cm。遺物は少なく、北西隅壁際から甕(35)や高环(36)が出土した。

35は口径26.6cmの甕。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は長胴形をなす。外面はナデ調整、内面はヘラケズリ。36は口径18.4cmの高环。环部は体部下半に緩い稜を作ってストレートに外反し、脚部は小さく膨らむ。环部外面は刷毛目後にナデ、脚部は丁寧なナデ調整。

#### 81号住居跡 SC-81 (6.8.11.32.33.35)

調査区の東側に拡がる住居跡群中の北西端にあり、80号住居跡の北に隣接して位置する。南壁を除く大半が調査区外にあるために全容は明らかでないが、平面形は一辺が5.3mほどの方形プランをなそう。床面は平坦で、貼り床等は未検出。主柱穴は南東隅(P3)にあり、柱間が2.5mほどの4本柱となろう。遺物は少ないが、P1上の床面から砥石(177)が、東壁際からは甕(39)や鉢(41)が出土した。また、覆土中からは石包丁(158)や鉄器(185)も出土している。

37は口径10.4cmの小型丸底壺。口縁部は短く直口し、胴部は球形をなす。外面はハケ目、内面はケズリ。38、39は二重口縁壺である。口径は38が20.4cm、39が25.8cm。口縁部は短く外反した後に強く屈曲して直口気味に立ち



12. 整穴住居跡群（北より）



13. 65号住居跡（南より）



14. 64・68・69・90号住居跡（北より）

上がる。屈曲面と口縁端部は凸帯状に小さく外方に突出する。41は手捏ねの浅鉢で、口径は10.8cm。体部は半球形で、口縁部は小さく外方に開く。外面は押圧ナデ、内面はケズリ。40は底径8.6cmの台付鉢であろう。脚部は短く外方に突出する。150は背部を欠く石包丁で、刃部は両縁から磨き出している。177は砂岩質の砥石で、短冊形をなす。幅は19cm、厚さは4.9~5.8cmの大型品である。185は現長8.7cmの不明鉄器。基部は径1.8cmの袋状をなし、木質材が装着されている。先端部は欠失しているが断面は1×1.2cmの方形で、鉢状あるいは盤状の刺突具かと考えられる。

#### 90号住居跡 SC-90 (9.11.14.32.35)

調査区の東側に重複する住居跡群の中央に位置し、64号住居跡より新しく、68号住居跡よりも古い。北壁が消失しているが、平面形は東西が5.7m、南北が6mの方形プランをなす。壁面は急峻で、壁高は5~10cmと浅い。床面には浅い凹凸があり、未確認ながら貼り床状をなしていたと思われる。主柱穴は南西隅柱が未検出ながら4本柱(P13~P15+α)であろう。柱穴は40~50cmの円形で、深さは25~50cm。北西隅柱は西壁寄りにあり、住居プランとの間にはずれがある。また、西壁に沿って楕円形の土壙(SK-112)があるが、住居跡に付設するかは明らかではない。遺物は東~南壁に沿った床面上から小型丸底壺(42, 43)、高环(46, 47)、鉢(44)と鉄鎌(186)が、覆土中から小型石謫(159)が出土した。

42、43は小型丸底壺。42は口径8.4cm、器高8.8cm。口縁部はストレートに外反し、胴部は球形をなす。43は口径8.4cm、器高7.1cm。口縁部は短く外反し、胴部は扁球形をなす。いずれも外面はハケ目後にナデ、内面はケズリ。44は小型鉢で、口径8.1cm、器高は7cm。口縁部は半球形の脛部から小さく突出出し、内唇に弱い段を作る。外面は継ハケ目、内面はナデ。45は口径42.4cmの丹塗り壺。外面には5~8本を単位とする暗文を1~1.5cmの間隔を置いて施文している。内面は横方向の研磨。46、47高环。46は底径11.6cm。脚部はスマートにのびた脚部は大きく屈曲して外方に開く。47は口径19.9cm。体部は下半に屈曲して稜を作り、口縁部はストレートに外反する。159は小型石謫。長さ2.1cm、厚さは1.1cmで、両軸に沿って十字形に溝を穿っている。160は砂岩質の磨り石。186は定格式鉄鎌で、長さ14cm、刃部幅は4.8cm。茎の断面は方形で、先細りとなる。

## 2). 土 壤

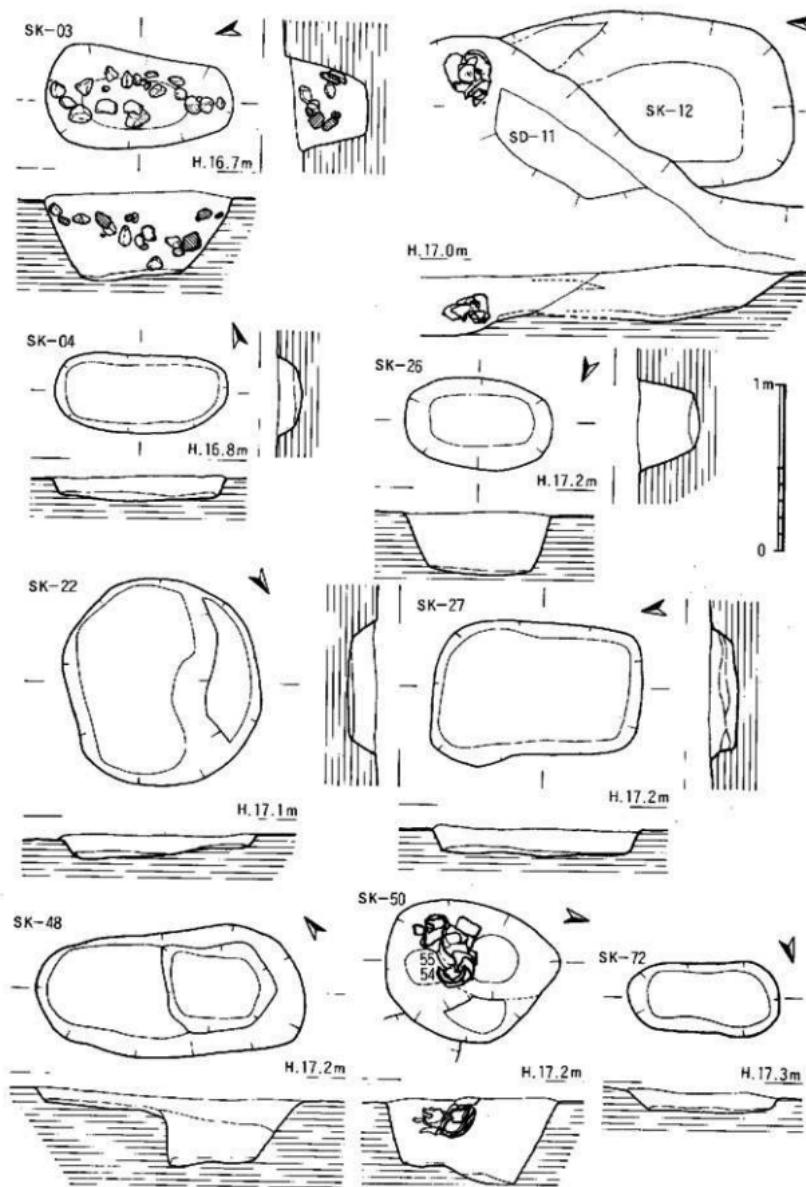
土壤はすべてで29基を検出した。これらの土壤は、調査区のはば中央を南北にのびる溝(SD-11)を境として2グループに大別される。ひとつは調査区西半の旧河床に面した緩斜面上に散漫に分布する一群で、4基(SK-02~05)の小型土壤からなる。これに対してSD-11の東側の段丘上には25基が住居跡を巡るように濃密に分布し、その形状も大小様々である。平面的には方形~円、楕円形プラン(SK)と不整形(SX)などのとがある。また、その機能としては86号と87号土壤が埋跡のほかは明らかでなく、この形状の相違が機能に起因するかは直ちには云いがたい。

#### 3号土壤 SK-03 (15.17)

調査区の西端にある土壤で、上面は近世溝(SD-06)に切られている。平面形は長軸109cm、短軸40~60cmの楕円形プランを呈し、N-15°~Eに主軸方位をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、深さ45~50cm。断面形が舟底状をなす壠底は、北側が浅く凹む。壠底より15~30cm上面の壠中位には拳大の花崗岩礫が一面に拵がっていた。覆土は、濃灰黒色土で、壠底近くは粗砂粒が多く混入していた。

#### 4号土壤 SK-04 (15)

調査区西端の緩斜面上にある土壤で、3号土壤の北3.5mの距離に位置する。平面形は長軸100cm、短軸45cmの楕円形プランをなし、主軸方位をN-16°~Wにとる。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は15cm。底面は平坦であるが、中央部は円レンズ状に浅く凹む。覆土は濃灰黒色土で、壠底の浅い凹みには粗砂粒の混入した灰褐色土が堆積していた。



15. 3・4・12・22・26・27・48・50・72号土壌実測図(1/30)

### 12号土壙 SK-12 (15.18)

調査区の中央部にある土壙で、22号土壙のすぐ西に位置する。北側小口は11号溝によって削平されている。平面形は隅丸の長方形プランを呈し、短軸は100cm、長軸は190cmに復原できよう。主軸方位はN-2°-W。壁面は緩やかに立ち上がり、東側壁の北小口側には中位に小さなフラット面を造る。断面形は逆台形をなし、壙底は平広である。その形状から土壙墓の可能性もなくはない。

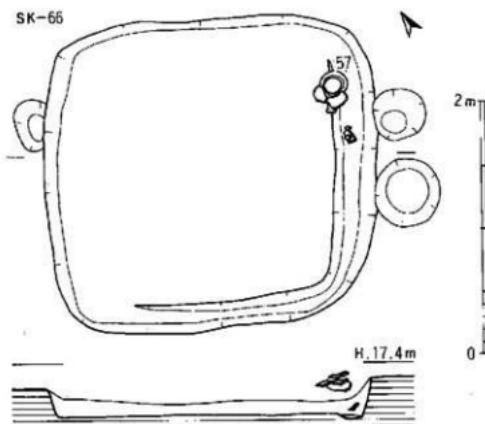
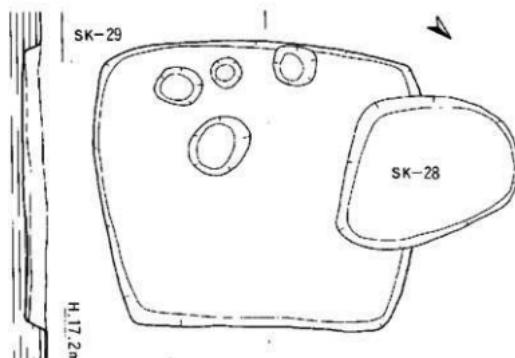
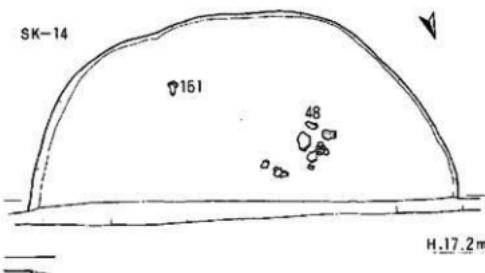
### 14号土壙 SK-14(16.18.22.32.33)

調査区の中央部にある大型土壙で、22号土壙のすぐ北に位置する。その北半が調査区外にあるために全容は判然としないが、平面形は直径が3.4mほどの円形プランをなそう。急峻に立ち上がる壁は深さが3~15cmと浅く、断面形は逆台形を呈する。遺物は少なく、床面上からは台付鉢(48)と石器(161)が出土している。

48は口径16.1cmの台付鉢。口縁部は「く」字状に外反し、副部は球形をなす。調整は内外面ともハケ目。49は口径22.8cmの高環。直口気味に外反する口縁部は深く、内面はハケ目調整。161は敲打具様の棒状石器で、用途は不詳。先端部は拳状に膨らみ、その膨らみの下部には細線状の刻みを1~3条施し、側縁は研いでいる。軸部は握り部様に細まって円筒形をなし、基部は扁平な方形になる。168は砂岩質の砥石で、上下側縁とも研磨としている。

### 22号土壙 SK-22 (15.18)

調査区の中央部にある円形の土壙で、14号土壙のすぐ南に位置する。主軸をN-33°-Wにとり、長径120cm、短径110cmのほぼ正円形を呈す



る。壁面はやや急峻に立ち上がり、西壁側にフラット面を造る2段掘りの構造をなす。壇底は平坦であるが東にむかって緩やかに傾斜し、壁高は西壁側が7cm、東壁側が18cmを測る。覆土は濃黒灰色土で、下層には粗砂粒が多く混入していた。遺物は少ない。

#### 26号土壙 SK-26 (15. 18)

調査区の中央部にある小型土壙で、14号土壙のすぐ東に位置する。平面形は長軸87cm、短軸54cmの楕円形プランをなし、N-67°-Eに主軸方位をとる。深さ37cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い凹レンズ状をなす。覆土は上層に暗茶褐色土、下層に粗砂粒を含んだ濃灰黑色土が凹レンズ状に堆積していた。

#### 27号土壙 SK-27 (15. 18)

調査区中央の26号土壙のすぐ東にある。平面形は長軸122cm、短軸78cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位はN-9°-E。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は15cm。壇底は平坦で、断面形は逆台形をなす。

#### 28号土壙 SX-28 (16. 18)

調査区の中央部に位置する不整形の土壙で、東壁側は29号土壙と重複し、これより新しい。主軸を東西にとり、長軸155cm、短軸115cm。やや急峻な壁面は深さ20cmで、壇底は浅い凹レンズ状をなす。覆土は黒褐色土で、土器小片がわずかに出土した。

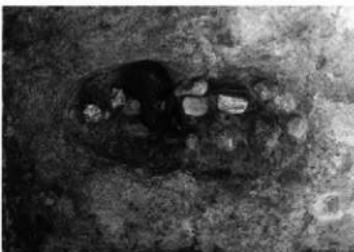
#### 29号土壙 SK-29 (16. 18. 22)

調査区の中央部に位置する大型土壙で、西壁は28号土壙に切られている。平面形は一辺が215~250cmの南壁がやや広い方形プランをなす。壁面は急峻で、壁高は10~20cmを測る。壇底は平坦で、断面形は逆台形を呈する。覆土中からは、小型丸底壺(50・51)とミニチュア土器(52・53)が出土している。

50、51は小型丸底壺。50は口縁部が短くストレートに立ち上がり、口径は6.8cm。51は口径10.6cmで、口縁部は「く」字状に外反し、胴部は球形をなす。内唇と外面はハケ目、内面はケズリ。52、53はミニチュア土器。52は口径3cm、器高1.7cmの鉢。53は口径1.3cm、底径1.8cm、器高4.2cmの器台。粘土棒の両端を押圧して受け部と底部を作る。この鉢と器台は対をなそう。

#### 48号土壙 SK-48 (15)

調査区中央の東寄りに位置し、63号住居跡と50号土壙のすぐ南に隣接している。平面プランは、長軸155



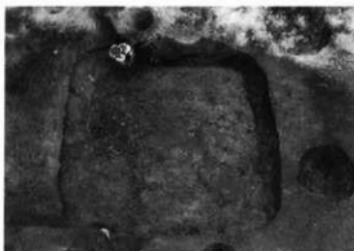
17. 3号土壙（西より）



18. 12・14・22・26・29号土壙（北より）



19. 50号土壙（東より）



20. 66号土壙（西より）

cm、短軸80~85cmの小口がやや丸みを帯びた長方形をなし、主軸方位はN-49°-Wにとる。土壌は一旦西側にフラット面を造り、そこから東側部を更に掘り深める2段掘りの構造をなしている。壁面は比較的緩やかに立ち上がり、深さは最深部で45cmを測る。

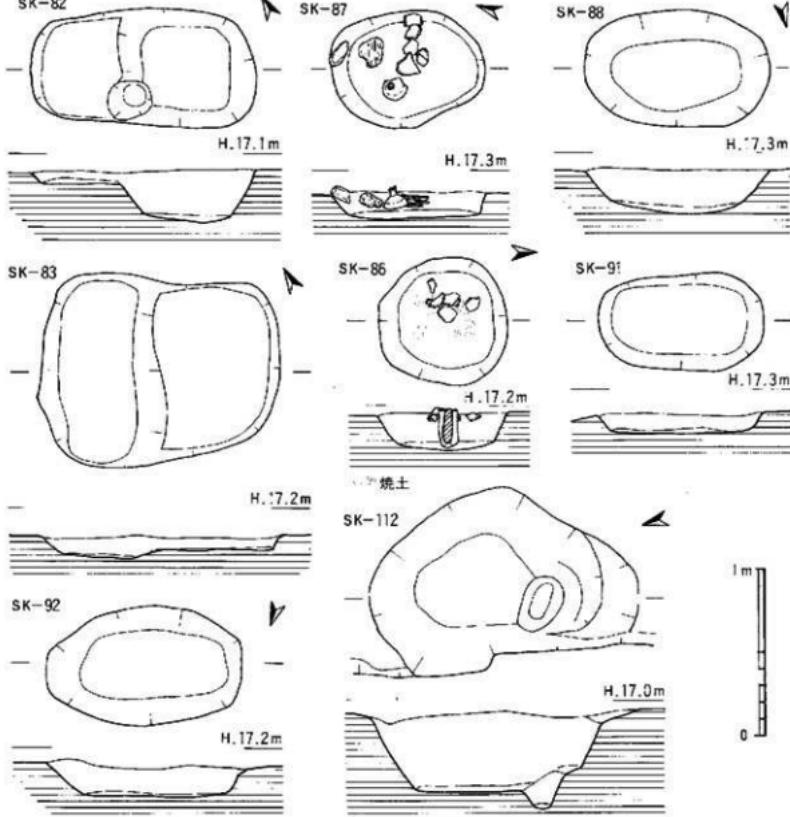
#### 50号土壙 SK-50 (15.19.22)

調査区中央の東寄りに位置し、48号土壙と63号住居跡の間にある。平面形は長径95cm、短径80cmの不整円形プランを呈し、主軸方位を南北位にとる。壁面は急峻に立ち上がる。壙底は検出面より40cmの所で一度平坦面を造り、その後更に北側を10cmほど掘り下げる2段掘りの構造をなす。覆土は粗砂粒を多く含んだ暗褐色土で、上層からは押し潰された2個体の甕(54・55)が出土した。

54、55は甕。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は球形をなす。外面はハケ目、内面はナデーケズリ。54は口径16cm、器高26.4cm。55はラッパ状に開く高环の脚で、内面に弱い稜を作る。底径13.4cm。

#### 66号土壙 SK-66 (16.20.22)

調査区の東端に位置する大型土壙で、68号住居跡のすぐ南にある。平面形は、長軸26cm0、短軸245SK-82



21. 82・83・86・88・91・92・112号土壙実測図(1/30)

cmの隅丸方形プランを呈する。壁面は急峻で、東壁と南壁下には幅15~20cm、の浅い周溝が巡る。壁高は25~30cm。床面上や壁外には柱穴がなく積極的ではないが、壁下に巡る周溝を勘案すると小型の住居跡の可能性も僅かながらに残る。覆土中からは甕(57)等がわずかに出土している。

57は口径17.8cmの甕で、「く」字状に外反する口縁部に球形の胸部がつこう。胎土は良質。

#### 7号土壙 SK-72 (15)

調査区東南部の67号溝が矩形に曲がる屈曲部に位置し、88号土壙の東方1.5mの距離にある。平面形は、長軸90cm、短軸45cmの長方形プランを呈し、N-73°-Wの東西位に主軸をとる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形をなす。深さは15cm。

#### 8号土壙 SK-82 (21)

調査区東部の80・81号住居跡に挟まれた空間域にある。平面形は、長軸131cm、短軸7cmの長方形プランを呈し、主軸はN-61°-Wの東西位にとる。壁面はやや急峻で、東半部が一段低くなる2段掘りの構造をなす。壇底は西側の1段目は平坦で、東側の2段目は浅く凹レンズ状に凹む。深さは1段目が10cm、2段目が31cm。覆土は暗褐色土であるが、東側の底面には砂礫層が薄く堆積していた。

#### 8号土壙 SK-83 (21)

調査区の東側にある浅い土壙で、80号住居跡のすぐ西に位置する。平面形は、長軸14cm、短軸95~115cmの西側がやや広い方形プランを呈し、N-59°-Wの東西位に主軸をとる。土壙は東側に一ヶ月型面を造り、更に西側を5cmほど浅く掘り込む2段掘りの構造をなしている。深さは1段目が10cm、2段目は15cmで壇底は浅い凹レンズ状をなす。覆土は砂粒を含んだ濃灰褐色~黒灰色土。

#### 8号土壙 SK-86 (21)

調査区の東北部にある小型土壙で、西側は65号住居跡の北東隅壁を切っている。平面プランは径75cmの円形をなす。壁面はやや急峻で、壁高は22cmを測る。断面形は逆台形を呈し、壇底は浅い凹レンズ状をなす。土壙の中央部には、径8cm、長さ23cmの焼けた棒状の花崗岩が立ち、周囲には焼土塊が拵がっていた。のことから本土壙は炉跡で、花崗岩柱は支脚として使用されたものであろう。

#### 8号土壙 SK-87 (21.22)

調査区の北東端にある円形、107・108号上塙よりも新しい。平面形は、長軸が90cm、短軸は80cmで、主軸方位をN-18°-Wにとる。15cmの浅い壁面は急峻で、断面形は逆台形をなす。土壙の中央部からは高杯(58)と甕片が出土した。北東壁際には15cm四方の焼土塊があり、覆土も焼土粒を含んだ橙色土であることから焼土壙の可能性も考えられるが、壁面は焼けていない。

58は口径15cm、底径10.8cm、器高12.7cmの高杯。体部中位には横回線が巡り、口縁部は緩やかに外反する。脚部はラッパ状に開き、端部を小さく跳ね上げる。胎土は砂粒を含み、淡橙~淡黄褐色。

#### 8号土壙 SK-88 (21)

調査区南東部の72号土壙の西方1.5mの距離にある。平面形は長軸110cm、短軸70cmの楕円形を呈し、主軸方位をN-77°-Wにとる。深さ25cmを測る壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底状をなす。覆土は暗黄褐色粘質で、壇底には砂粒を含んだ褐灰色土が凹レンズ状に薄く堆積していた。

#### 8号土壙 SK-89 (34.35)

調査区の北東端に位置し、68・69号住居跡よりも新しい。平面形は長軸、短軸の不整形な椭形を呈し、南北位に主軸をとる。壁面は急峻で、壁高は5~10cmと浅く、壇底は浅い凹レンズ状をなす。西壁に沿って銅鏡(181)が出土した。

181は鋳造陽模式銅鏡。鏡身から茎まで鋳がとおり、鏡身には研ぎ痕が残る。断面形は鏡身が菱形、茎は側縁が凹む楕円形。187は幅1cm、厚さ2.5mmの用途不明鉄器。

**9 1号土壙**

SK-91 (21.22)

調査区の東端にある  
小土壙で、66号土壙の  
すぐ北東に位置する。  
平面プランは、長軸95  
cm、短軸55cmの長方形  
を呈し、N-33°-W  
の南北位に主軸をとる。  
壁面は緩やかに立ち上  
がり、断面形は逆台形  
をなす。深さ12cm。

50は弥生中期の甕で、  
底径9.8cm。外面はハ  
ケ目、内面はナテ調整。

**9 2号土壙**

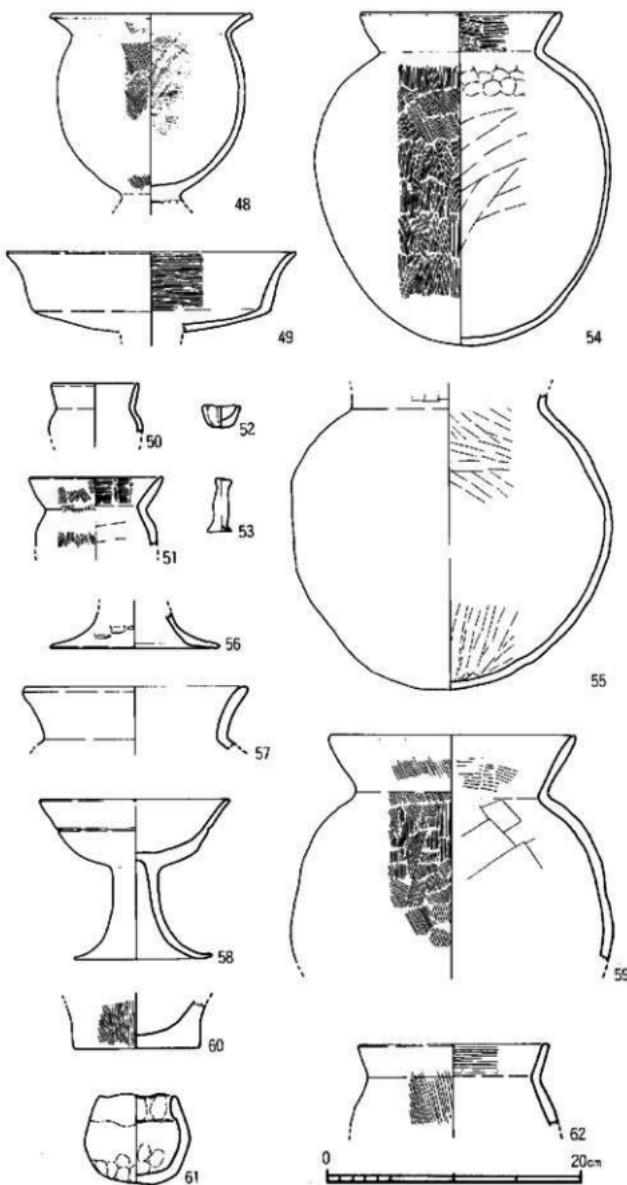
SK-92 (21)

調査区の東端にある  
小土壙で、68号住居跡  
のすぐ東に位置する。  
平面形は長軸、短軸の  
楕円形プランを呈し、  
主軸方位をN-71°-  
Eの東西位にとる。深  
さ22cmを測る壁面は緩  
やかに立ち上がり、断  
面形は逆台形をなす。

**9 4号土壙**

SK-94 (22)

調査区の北東端にあ  
る不整形な土壙で、92  
号土壙のすぐ北東に隣  
接している。東半部は  
調査区外にあり、西壁  
と北壁が消失している  
ために全容は明らかで  
ない。壁面は緩やかに  
立ち上がり、深さ15~  
20cmの底底は凹レンズ  
状に浅く凹む。



22. 土壙出土土器実測図(1/4)

60は手捏ねの小型壺で、口径6.2cm、器高は7.3cm。胴部は球形をなし、内傾する口縁部は内唇に粘土紐を貼って肥厚している。砂粒を多く含み、褐~灰褐色。

#### 107号土壤

SX-107 (22.34)

調査区の北東部にある大型土壤で、69号住居跡や108、109号土壤と重複しているが前後関係は明確にできなかつた。平面形は明らかでなく、壺底の形状からして東西に主軸をとる長方形に近いプランをなそうか。覆土上層か

ら石鎌(155)や鉄鎌(192)と甕片等が多く出土している。

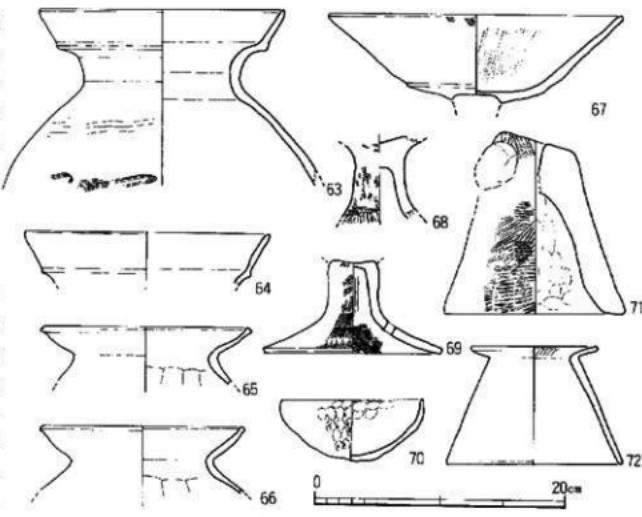
61.62は甕、61は口径19.5cm。口縁部はストレートに外反し、胴部は球形をなす。外面はハケ目、内面はヘラ調整。砂粒を多く含み、淡橙褐色。62は口径15cm。「く」字状の口縁部は短く外反し、胴部は倒卵形をなす。外面と内唇は粗いハケ目、内面はナデ調整。182は長茎脚式の銅鎌。鎌身は刃部を欠失するが、鍋がとおり断面形は菱形。茎は長く断面は円形をなす。192は端部を小さく折り返し、鉄鎌と思われる。身幅2.6cm、背厚は3mm。

#### 108号土壤

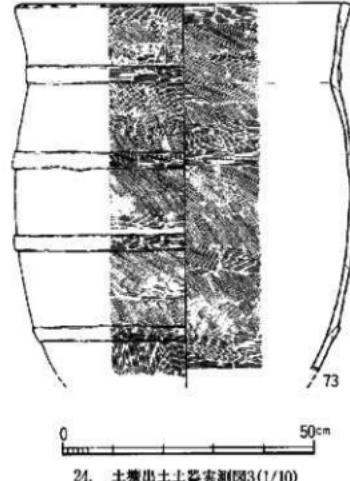
SX-108 (22.31.35)

調査区の北東端にある大型土壤で、107号土壤と重複するが新旧は明らかではない。全容は判然としないが、直線的に長くのびる南壁からして、堅穴住居跡の可能性もなくはない。覆土からは終末期の大型甕(151)、鉄鎌(195~198)、手鎌(189・190)、投擲(204)等多くの遺物が出土している。

63、64は二重口縁甕。口縁部は頸部からのびて屈曲し、弱い段を作り更にストレートに外反する。胴部は球形をなす。口径は63、64とも19.4cm。65、66は布留甕。口縁部は膨らみ気味に外反し、端部を上方に小さく摘み上げる。内面はヘラケズリ。口径は65が16.8cm、66が16.3cm。67~69は高壺。67は口径23.4cm。壺部下半に弱い四線状の段を作り、口縁部は大きくストレートに外反する。



23. 土壟出土土器実測図2(1/4)



24. 土壟出土土器実測図3(1/10)

内面は寛先工具による縦ナデ。69は底径14.2cm。筒状の脚部は短く、裾部は緩く屈曲して大きく外反する。屈曲部には対位に3孔を穿つ。内外面ともハケ目調整。70は口径11.1cm、器高5.1cmの浅鉢。口縁部は半球形の体部から直口で小さく摘み上げて作り出す。内外面とも押圧ナデ。71、72は器台。71はいわゆる杏形容器台である。傾斜する天井部には円孔を穿ち、側縁の一端を嘴状に摘み出す。外面はタタキ目、内面はナデ。72は口径10cm、底径14cm、器高は9.4cm。口縁部は小さく外反し、脚部はストレートに聞く。73は口径66.8cm



25. 11号溝（北より）

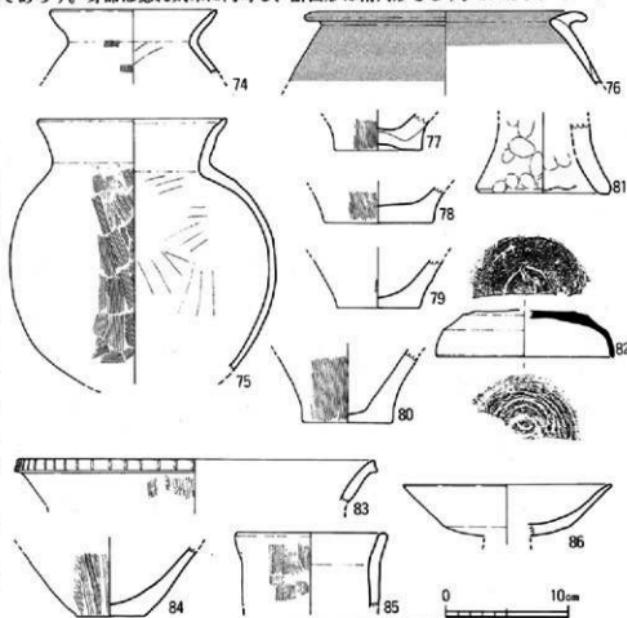
の大型甕。口縁部は長卵形の胴部から小さく屈曲してストレートに立ち上がり、平縁な口唇部にはヘラ描きのX印を施している。頭部と胴部には幅3.5cmの扁平な凸帯を13~15cmの間隔で4条貼り付けている。口唇部~内外面ともにハケ目調整。155は黒曜石の凹基式無茎石鎚で、長さ2.1cm。189、190は手鎚。189は長さ9.0cm、刃部幅2cm、背厚は2mm。両端部は1~1.1cm折り返して袋部を作り、木質部が銷着している。190は刃部幅1.8cm、端部を折り返した袋部には木質が銷着している。193、194は鉄鎌の先端部か。刃部は鉤状に内弯する。188、185~188は鉄鎌。185、186は有茎定角式の鉄鎌である。断面形は鎌身が梢円、基は方形をなす。刃部幅は195が2.2cm、196は2.6cm。188、197、198は基である。199は釣針の基部であろう。身部は捻れ気味に内弯し、断面形は梢円形をなす。204はラグビーボール状の土製投弾で、断面形は円形をなす。

## 109号土塹

SX-109 (32)

調査区の北東部にある大型の不整形土塹。107、108号土塹と重複するが新旧は明らかにしえなかつた。全容は判然としないが、遺存する東壁からすると主軸を南北にとる長方形プランをなそうか。塹底は浅い凹凸が著しい。東壁際から銅鎌(182)が出土した。

182は玄武岩質の擦り石。長さ7.4cm、幅6.4cmで平縁部には敲打痕が残る。



26. 11・67・77号溝出土土器実測図(1/4)

### 112号土壙 SK-112 (21)

調査区東部にある90号住居跡の西壁際にあり、住居跡に付設する土壙かとも考えられる。平面形は、長軸157cm、短軸105cmの楕円形プランで、N-16°-Eに主軸方位をとる。深さ48cmの壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は浅い舟底状をなす。覆土は暗黒～暗褐色土で、粗砂粒が多く混入する。

### 3). 構造

溝は、大小合わせて8条を検出した。しかし、連闊して住居跡群を「コ」字状に巡る可能性のある2条(SD-11, 67)と南東隅の1条(SD-77)を除いてはいずれも近世以降の所産と考えられる。

#### 1号溝 SD-11 (5.23.26.33)

調査区の中央部を南北流する溝で溝幅は135～195cm、深さは35～40cm。断面形は浅いU字状をなす。東壁は12号上塙を切り、壁際から出土した甕(64, 65)は12号上塙の遺物の可能性も考えられる。この溝の南側は未確認であるが、その覆土や形状からして67号溝と接続する可能性も考えられる。

74.75は球形の胴部に「く」字状の口縁部がつく土器器蓋である。口径は74が13.6cm、75は15.5cm。調整は外側がハケ目、内面はヘラケゼリ。169は底石。上面と側縁には溝状の研ぎ面がある。

#### 6.7号溝 SD-67 (5.26)

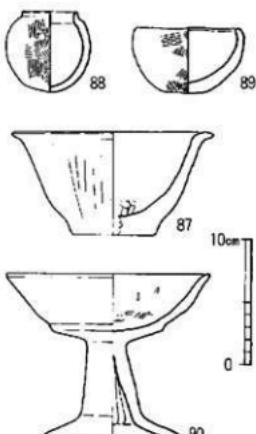
調査区の南東端にある溝幅が110～140cmの溝である。断面形は浅いU字状をなし、深さは30～35cm。溝は北へむかって緩やかに傾き、東岸の中段には狭いフラット面を造る。調査区の東端に沿って南北に流れる溝は、その南東隅で西へむかって屈曲する。この延長線上には南北にのびる11号溝があり、覆土や形状の類似性から接続して竪穴住居跡群を舟形に囲んで環濠状になる可能性も考えられる。

76～80は弥生土器の甕。76は口径23cm、口縁部は短く外反し、胴部は倒卵形をなそう。内斜～外面は丹塗り研磨、内面はナデ調整。77～80は底部で、77は上げ底気味になる。底径は77が7.2cm、78は9cm、79は6.8cm、80は7.4cmである。調整は外側がハケ目、内面はナデ。81は底径11cmの器台。内外面とも押圧ナデ調整。82は口徑14.6cm、器高3.8cmの須恵器環蓋。体部中位に弱い稜を作り、口縁部は直口気味に立ち上がる。大井部はヘラケゼリでヘラ記号があり、内底面にはタタキ痕が残る。

#### 7.7号溝 SD-77 (5.26)

調査区の南東端にある矩形の溝で、その屈曲部は67号溝によつて削平されている。溝幅は105～150cmで、深さは15cmを測る。壁面は緩やかで、断面形は浅い逆台形をなす。

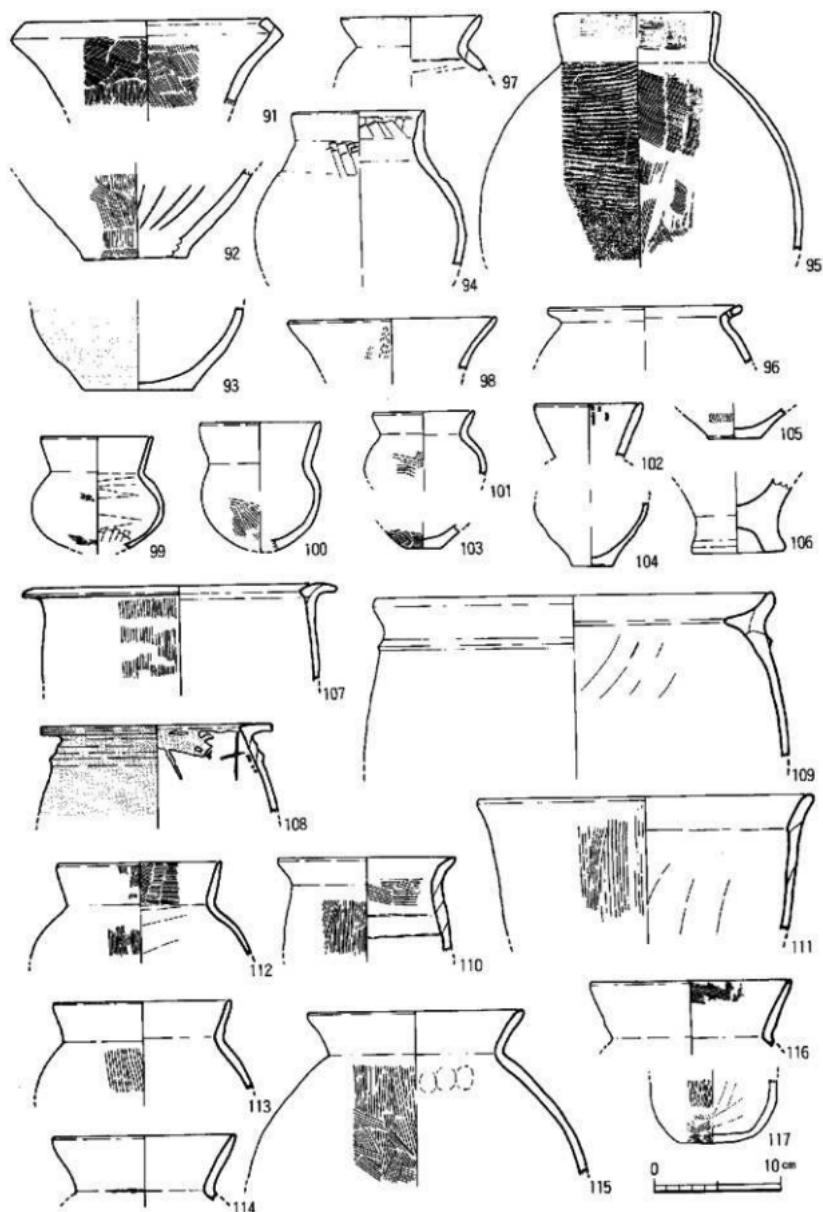
83は11径29.6cmの丹塗りの壺である。平坦に整えた口唇部にはヘラ書の刻み目を1.2～1.5cmの間隔で施文している。内面はヨコナデ、外面は刷毛目後にナデ。84, 85は甕。84は底径5.6cm、85は口径12.4cm。胴部は直口気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。外面は刷毛目、内面はナデ。86は高環で、口径は17cm。体部下半に弱い稜を作り、口縁部はストレートに外反する。



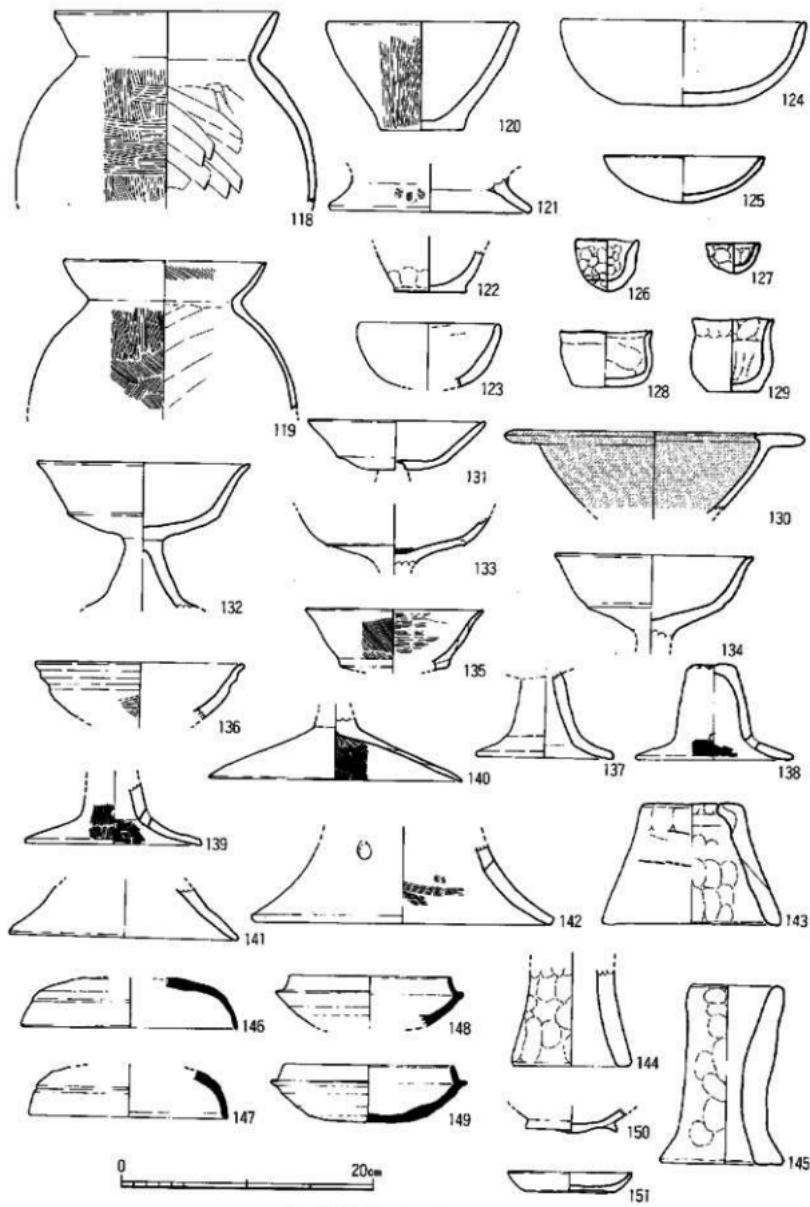
27. ピット出上上器実測図(1/4)

### 4). ピットと包含層出土の遺物

本調査区では、竪穴住居跡や土壙等のほかに多くのピットを検出した。これらのピットの中には底面に小碟を敷いたものがあり、明らかに掘立柱建物跡の柱穴と考えられるものもあったが、調査



28. 包含层出土器物实测图(1/4)



29. 包含层出土土器实测图2(1/4)

区が狭長なために建物跡としてまとまらなかったものもある。また、遺構面の上層には弥生時代中期から古墳時代初めの土器のほかに石器や土製品等の遺物を含む暗黄灰色～暗灰褐色土層が堆積していた。

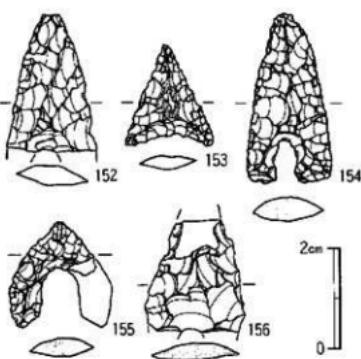
#### ピット出土の遺物 (27)

87は56号ピット出土の鉢である。口径16cm、底径6.4cm、器高は8.2cm。胴部はストレートに立ち上がり、口縁部は水平に短く突き出る。調整は粗いナデ。88は60号ピット出土の小型壺である。口径は4.4cm、器高は6.4cm。胴部は球形をなし、口縁部は短く直口とする。外面は粗いハケ目、内面はナデ調整。胎土は石英砂を含み、淡褐色。89は70号ピット出土の小型鉢である。体部は半球形をなし、口縁部は小さく突き出でて内傾する。口径7.8cm、底径3.1cm、器高は5.2cm。胎土は石英砂を多く含み、色調は暗褐色。90は71号ピット出土の高环である。口径16.1cm、底径10.9cm、器高は13.1cm。環部は体部下半にシャープな段を作り、口縁部は小さく膨らんで外反する。脚部は短くラッパ状に開く。環部内面はハケ目後にナデ、脚部内面はケズリ。

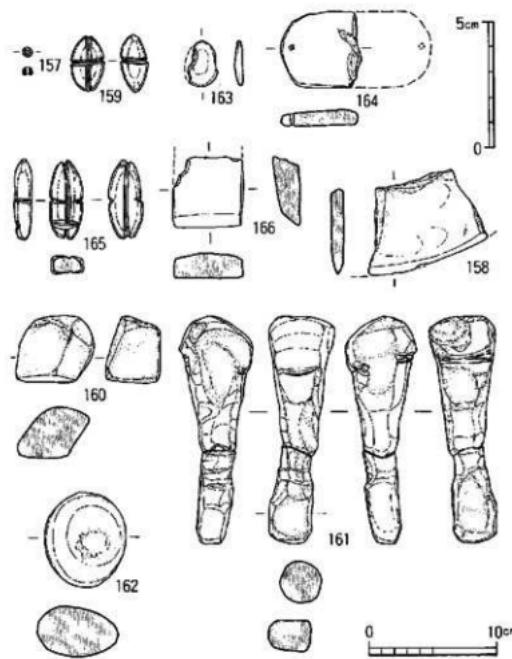
#### 包含層出土の遺物

(28, 29, 30, 31, 32, 34, 35)

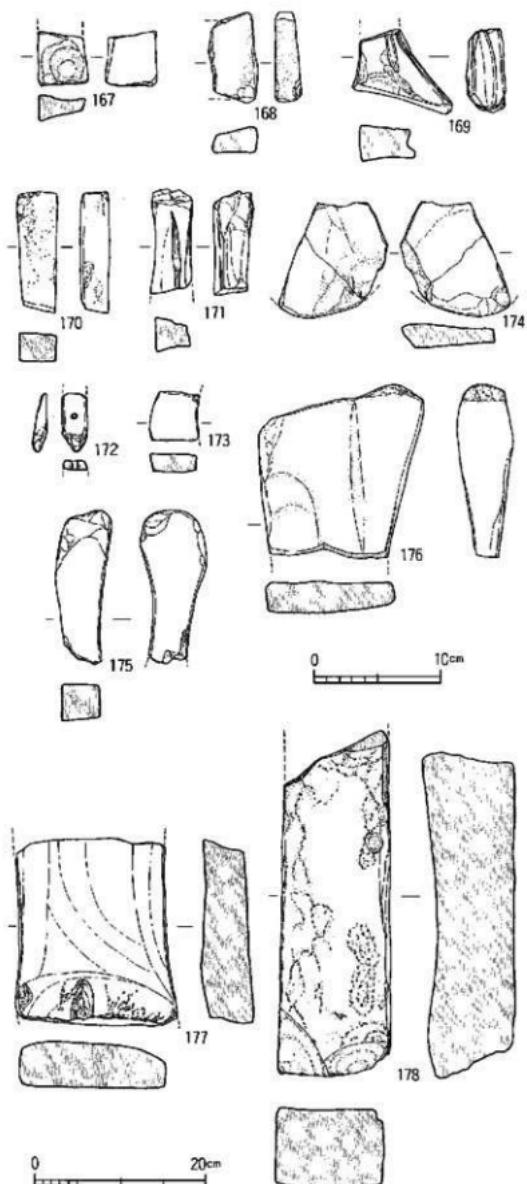
91は口径19cmの二重口縁壺。緩やかに外反する口縁部は強く屈曲して短くストレートに内傾する。内外面ともハケ目調整。92、93は壺底部。92は底径8.6cm、93は底径8.6cm。外面は丹塗り研磨、内面はナデ。94は口径10.4cm。口縁部は直口し、胴部は球形。95は口径13.2cmの長胴壺。直口する口縁部は内唇を小さく突き出で、胴部は卵形をなす。外面はタキ後に縦ハケ目、内面は横ハケ目。96は口径15.4cmの無頸壺。口縁部は小さく折り返して外反し、口唇部には円孔を穿つ。97～102は小型丸底壺。98は口径8.8cm。口縁部はストレートに外反し、胴部は扁球形。100は口径9.4cm、器高10.2cmで、胴部は球形をなす。101は口径8cm。「く」字状の口縁部は短く外反し、胴部は扁球形をなす。外面はハケ目後にナデ、内面はナデ～ケズリ。103～105は小さな底部がつく小型壺。104は底径3.2cmで、



30. 石器実測図I(I/1)



31. 石器実測図I(I/1 · 1/4)



肩部は肩の張った倒卵形をなす。106～119は甕。106～109は甕。106は器壁の厚い上げ底の甕で、底径は7.4cm。107、108は逆L字口縁の甕で107は口径24.8cm。106は口径18.2cmで、口唇部には2孔一对の円孔を穿ち、口縁部下に三角凸帯が巡る。外面～口唇は丹塗りで、内面には塗り跡がある。109は口径31.0cm、「く」字状の口縁部は内唇が強く張り出し、口縁部下には小さな三角凸帯が巡る。胴部は倒卵形をなさう。110は口径14cm。口縁部は短く「く」字状に外反する。111は長胴の甕で、口径26.4cm。口縁部は小さく外反し、胴部はストレートに窄まる。113～119は土師器甕。「く」字状に外反する口縁部は、ストレートなもの(112～114、116、118)、内唇気味のもの(119)と反り気味にのびるもの(115)がある。球形の胴部は外面がハケ目、内面はナデ～ヘラケズリ。口径は13～17.6cm。120～125、136は鉢。120は口径15.2cm、底径6.4cm、器高8.6cm。胴部は厚く内唇気味に立ち上がる。123～125は土師器鉢で体部は半球形をなす。123は口径10.8cm。124は口径19.4cm、器高6.8cm。125は口径12.8cm、器高は3.6cmと浅い。138は口縁部下に2条の凹線が巡り、口径は16.4cm。126～129はミニチュア土器。126、127は半球形の体部から口縁部を押出すて小さく摘み上げる。126は口径4.8cm、器高4.1cm。127は口径4.4cm、器高2.4cm。128、129は壺型のもので、体部は直口し、口縁部は小さく外反する。調整は指頭押圧ナデ。130～140は高環。130は丹塗りの高環で、口径は23.8cm。体部は扁平な半球形をなし、口縁部は水平な鋸先状をなす。131は口径14cm。体部下半は緩い稜を作り、口縁部はストレートにのびる。132、134は体部下半に凹線状の段を作り、外反する口縁部は小さく摘み出す。脚部は短く

ラッパ状にのびる。口径は132が16.8cm、134は15.8cm。135は口径14cm。体部下半は凸帯状の段を作り、口縁部は小さく膨らんで外反する。137~140は脚部。137は底径10.8cm、短いラッパ状の脚部は屈曲して小さく外反する。138、139の脚部はやや膨らみ、裾は反り気味に開く。底径は138が12.5cm、139は13.8cmで屈曲部には孔を穿つ。140は底径20cm。裾部は低くストレートに開き、小さく短い脚部がつく。外表面は研磨、内面は細かいハケ目。142~145は器台。142は底径23.8cmで、ラッパ状に開く。

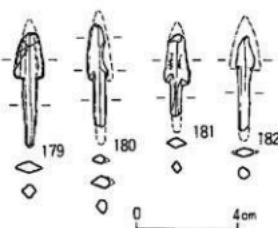
143は口径8.2cm、底径14.2cm、器高9.6cm。体部はストレートに開き、天井部には孔を穿つ。145は口径7.2cm、底径9.8cm、器高14.2cm。器壁は厚く口縁部は筒状に小さく外反する。146、147は須恵器环蓋。体部中位に浅い凹線状の段を作る。口径は146が16.9cm、147は15.6cm。148、149は須恵器环身。口縁部は短くストレートに内傾する。148は口径12.6cm、149は口径12.2cm。器高は4.5cm。外表面はヘラケズリ、内面はナデ。150は土師器の高台付壺で、底径7.2cm。151は口径9.8cm、器高1.6cmの土師皿である。

154、156は回基式無茎石錐。154は黒曜石製で長さ3.4cm、刃部幅は1.6cm。156は安山岩製で、先端部と基部を欠く。

163は碧玉の未製品。側縁を欠くが瓢状をなし、長さは1.8cm。164は滑石製石帯。側縁は半円形に研ぎ出し、1mmの細孔を穿つ。165は長さ3.2cm、幅1.3cm、厚さ7mmの小型石錐。両面に縱溝を、次に表面に2本の横溝を刻んでいる。166は層灰岩質の扁平片刀石斧で、刃部幅は2.8cm。170~176、178は砥石である。171は上面と側縁に溝状の研ぎ痕がある。172は安山岩質で、小口面を削り出し上縁に3mmの円孔を穿っている。178は砂岩質の大型砥石で、幅13cm、厚さは9.1~11cm。上縁が回レンズ状に凹む。

200は長さ2.9cm。基部が尖り、鐵錐の茎部か。

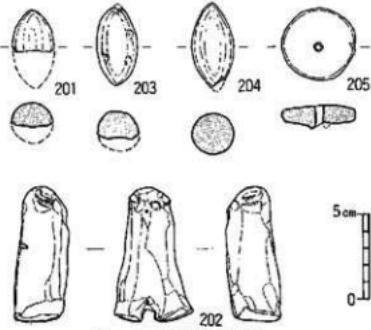
203はラグビーボール状の上製投弾。205は径4.3cm、厚さ1.1cmの土製紡錘車で、中央に孔径4mmの円孔



33. 銅錫実測図(1/2)



34. 鉄器実測図(1/3)



35. 土製品実測図(1/3)

を焼成前に穿っている。202は長さ8cmの上偶である。体部上縁の左右に摘み出して小さな耳を作り、その下に押圧して目を付けている。目の間には刺突して口を作っている。足は円筒形の体部下半を左右に分けて短く作り、股間に線描きの陰部を刻んでいる。

## IV. おわりに

野方久保遠跡の第4次調査区は、十郎川の開拓によって形成された段丘上に立地する。発掘調査は、設計上の規制から限られた範囲に留まり、その全容を明らかにするには至らなかったが、弥生時代後期～古墳時代初めの竪穴住居跡や土壙を検出した。これらの竪穴住居跡や土壙は、調査区中央のSD-11を境として西側は敷漫であるが、東側の段丘頂側は重複して濃密な分布を示す。これらは河床に面して立地する占地的な制約に起因するものであろう。この竪穴住居跡群の東から南にはSD-67が矩形に巡るが、その形状、腹上はSD-11のそれにきわめて類似する。このことは繋がって一連の溝となる可能性を暗示し、コ字形に住居跡群を囲んで環濠状の集落空間を有すること意味する。しかしながら、この空間域は東西幅が26mと小規模なもので、十郎川を挟んで左岸に対峙する野方中原遠跡の大規模な環濠集落に対比すると好対照をなす。また、南へ200mの距離にある第1次調査区では多くの竪穴住居跡が検出されながらも、それを巡る環濠は確認されていない。この二つの集落間ににおける構成や在り様の相違は、それが直ちに三者間の政治的、生産的基盤の違いに起因するとは断じがたいか、きわめて興味深い結果を生み出そう。

一方、青銅製造物等を供獻する墳墓としては、中期前半～末の妻柏墓域である第2次調査区が北東へ200mの距離に位置し、中期前半の妻柏墓には細形銅劍、把頭飾と勾玉類が副葬されていた。次に後期の野方中原遠跡では、環濠域外にある箱式石棺墓に内行花文鏡、獸帶綫や勾玉類が副葬されている。更に終末期の宮の前遠跡の箱式石棺墓群は、墳丘墓に埋納されガラスや碧玉製の玉類が副葬されていた。この一連の推移は野方久保遠跡周辺の集団が、有田遠跡や飯倉唐木遠跡と同様に平野の要衝に根ざしながら弥生時代を通して地域の優位性を保持しつづけた事の証左となるものであろう。

第4次調査では4点の銅鏡が、竪穴住居跡と不整形土壙から出土した。銅鏡は100を越す遠跡から出土し、その約70%が弥生時代のもので畿内の遠跡から出土したものが大半を占めている。博多湾沿岸でも調査例が増え、14遠跡で61点(36表)が出土し、そのうち14点が野方久保遠跡から出土している。詳細な検討は後事に譲るが、弥生時代の銅鏡は実用的な利器としての性格がきわめて強いものであり、それが多量に出土することはそれを要する政治的、地域的要因の想起を窺わせる。

遺跡名	所在地	出土遺構名	点数	時期	遺跡名	所在地	出土遺構名	点数	時期
野方遠跡	福岡市東区野方1丁目	妻柏塚・佐倉塚	10	弥生後期	-	(600)	妻柏塚(丁目2)	佐倉塚	L
野方遠跡	福岡市東区野方2丁目	妻柏塚	1	弥生後期	-	(600)	妻柏塚(丁目3)	路	L
・ (SD-67)	野方町1丁目11	妻柏塚	1	弥生後期	古墳道(67号)	野方町1丁目11号地内	小穴	L	
・ (FD地)	野方2丁目10番	妻柏塚	1	弥生中期	古墳本道(67号)	野方10番	佐倉塚	L	弥生後期
野方遠跡(1丁目)	福岡市東区野方1丁目	妻柏塚	1	中期	高櫛遺跡(67号)	野方1丁目	土壙	L	中期
・ 須原	高櫛1丁目	土壙	1		和田遺跡	野方1丁目	山陽園墓地	1	中期後
・ 須原	高櫛1丁目25	第六曲輪跡	1	中期	田村遺跡(68号)	平尾天子町字木原	妻	L	中期後
北野遠跡(1丁目)	野方町1丁目17-24	手	1	弥生後期	アエゾノ遺跡	平尾1丁目	昭和遺跡	7	弥生後期
・ (1丁目)	野方町1丁目25-30	佐倉塚	2	中期	佐久島遺跡(68号)	野方 大字野方久保東	佐倉塚	10	中期後
・ (2丁目)	野方町1丁目38	妻柏塚	1	中期	佐久島遺跡(68号)	野方 野方1丁目51-2番	佐倉塚・七塚	4	中期後
・ (2丁目)	野方町1丁目39-1	妻柏塚	1	中期中期	高櫛遺跡(68号)	野方 墓原	高櫛不動門	9	中期後
・ (3丁目)	野方町1丁目39-2番	土壙	1	弥生後期	高櫛遺跡(68号)	野方 墓原2丁目1番地	妻柏塚	1	中期後
・ (3丁目)	野方町1丁目39-1	土壙	1	中期後期	金谷工場(68号)	野方 今寺	佐倉塚	1	中期後

36. 銅鏡出土地名表(福岡市)

---

## 野方久保遺跡3

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第438集

1995年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1  
印刷 大同印刷株式会社

---